Assemblage and Hologram についての AI（Ajent I）による解説

論文の全体像

池村圭造の Assemblage and Hologram: Two Spectral Forms of Modern Urban Condition は、現代都市を単なる建築物の集合としてではなく、人がどのように都市を認識し、どのような空間経験をしているかという視点から捉え直した論文です。著者は、近代都市の理念が都市を秩序立てようとしてきた一方で、現実の都市はむしろ断片化し、さらに消費社会の進展によってイメージとして経験される度合いを強めたと考えます。その変化を説明するために、assemblage と hologram という二つの「スペクトル的な形態」を提示しています。論文自身も、第一に二つの形態の違い、第二にそれが生まれる思想的背景、第三に写真が都市経験をどう変えたか、第四に消費社会が空間経験に何をもたらしたか、という順で議論すると述べています。

問題設定

論文の出発点は、十九世紀以降の急速な産業化によって大都市が混乱した空間になったという認識です。著者によれば、近代都市イデオロギーとは、この混乱を否定し、都市に明快な秩序を与えようとする発想です。その際に理想像となったのが 機械のイメージ でした。機械は制御可能で、機能が明確で、秩序だったものに見えるため、近代社会はそれを都市秩序の模型として用いたという理解です。つまり、近代都市は自然発生的な雑多さを整理し、合理的で管理可能な空間へ変えようとしたわけです。

ただし著者は、その秩序化の試みが完全には成功しなかったと見ます。なぜなら、都市は経済、交通、建築、労働、広告、人間の欲望など、多数の力が重なり合う場であり、単純な機械のようには動かないからです。ここに近代都市の根本的な矛盾があります。近代は秩序を求めたのに、実際にはその秩序化の過程そのものが新たな混乱や不安を生んでしまったということです。

アセンブラージュ

assemblage は、著者が現代都市の第一の相を示すために使う概念です。論文では、これは秩序なく蓄積する形態として説明されています。重要なのは、assemblage は単なる整った集合体ではないという点です。論文ははっきりと、assemblage は ensemble ではなく、そこには確固とした秩序がないと述べています。都市の中では、建物、道路、看板、制度、生活の痕跡、記憶、歴史的層位が重なり合い、統一的な全体像をつくるというより、互いにずれながら共存します。

この概念は、近代都市の現実をよく表しています。都市計画は一貫した秩序を目指しても、現実には多様な主体が別々の論理で空間を使い続けるため、都市はつねに寄せ集めの状態になります。著者はこの状態を否定的にだけ見ているのではなく、現代都市の実相として認識すべきものとして扱っています。つまり都市とは、本来一つの理想形へ収束するものではなく、異質な要素が重なり続ける動的な場であるという理解です。

ここで背景として参照されるのが、論文自身が言及するマンフレッド・タフーリの都市批判です。タフーリは資本主義的な都市の形成過程の中で、都市が苦悩や衝撃を抱えた空間になっていくことを論じました。池村はその文脈を受け継ぎ、近代西欧の大都市を assemblage として捉えています。つまり assemblage は、雑然として不安定で、しかも近代の理想と緊張関係にある都市像です。

ホログラム

これに対して hologram は、第二の都市像です。論文では、これは assemblage に似ているが、物質的な価値を欠いた形態だと説明されています。ここでのポイントは、都市がもはや実体としてだけでなく、像や表象として経験されるようになることです。広告、写真、映像、メディア、記号的消費が進むと、人は都市を身体的に歩いて理解するだけ

ではなく、視覚的イメージの連なりとして受け取るようになります。都市は現実の場であると同時に、視覚的に流通する像となります。

著者はこの説明のためにジャン・ボードリヤールの議論にも触れています。論文によれば、ボードリヤールの「America」は、消費社会の破局的な状態をシミュラークルやホログラムとして映し出すテクストです。池村はこの視点を用い、後期資本主義の都市では、実物の空間よりも、その表面、演出、視覚的魅力、消費可能なイメージの方が前景化していくと考えます。

ホログラムという比喩は、都市が空虚だと言いたいのではありません。むしろ、実体と像の関係が反転し、像の方が都市経験を支配するという事態を示しています。人は都市を「そこにあるもの」としてだけでなく、「見られるもの」「消費されるもの」「記憶されるイメージ」として経験するようになります。これが現代都市の第二の条件です。

写真の役割

この論文で特に重要なのが、キーワードにも入っている photography です。著者は、写真が都市の認識を変える決定的な媒介だと考えています。写真は都市の断片を切り取り、瞬間を固定し、実際の空間体験を別の平面へ移し替えます。そのため都市は、現場での連続的な経験ではなく、編集され、反復され、複製される視覚情報として理解されやすくなります。

ここで起こるのは、都市の経験の質的変化です。かつての都市経験が、身体を使って歩き、騒音や匂いや距離感の中で生じるものだったとすれば、写真以後の都市経験は、フレーム化された視覚の断片によって媒介されるものになります。写真は都市の現実を記録するだけでなく、都市をイメージとして消費する感覚そのものを育てる装置として働きます。著者が hologram を論じる際に写真を重視するのはこのためです。

つまり写真は、assemblage 的な現実の都市をそのまま再現するのではなく、それを選別し、表面化し、記号化し、別の都市像へ変換します。その結果、都市は現実以上に「見え方」によって理解されるようになります。現代の都市空間が視覚優位で、消費の対象として設計されやすいのは、この写真的感覚の浸透と深く関わっているというのが論文の重要な示唆です。

消費社会と空間

論文の後半で焦点になるのは、消費社会の進行が都市空間をどう変えるかという問題です。著者によれば、近代都市の秩序化は、最終的には資本主義的な都市形成と強く結びつきます。そして消費社会が成熟すると、都市は生活や労働の場であるだけでなく、視覚的魅力やイメージを流通させる場として組み替えられていきます。

このとき都市空間は、実用性や構造だけで評価されるのではなく、記号価値や演出効果によっても価値づけられます。街路、商業空間、ファサード、広告景観などは、実際の使用に先立って、まず視覚的な消費の対象になります。こうして都市は、物理的に存在する空間であると同時に、イメージとして循環する空間になります。著者が「catastrophic consumerism」と呼ぶ状況は、消費が都市の表層を限りなく増殖させ、都市経験の深さや連続性を失わせる危機を示していると読めます。これは論文の記述から導ける解釈です。

二つの概念の関係

この論文の核心は、assemblage と hologram を別々の現象として述べるだけでなく、現代都市の連続した変容の二相として捉えている点にあります。assemblage は、近代都市が秩序化される以前から抱えている雑多さや重層性を示します。hologram は、その都市がさらにメディア化と消費社会化を経て、像として経験される段階を示します。両者は対立しつつも、切り離せません。現実の都市は雑然たる集積でありながら、同時にイメージとして表面化した都市でもあるからです。

言い換えると、現代都市は「物が集まる都市」から「像が支配する都市」へ単純に置き換わったのではなく、両方の性格を重ね持っているということです。だからこそ都市は、歩くと雑多で断片的なのに、メディアの中では一貫したブランドや印象として提示されるというねじれを見せます。池村の議論は、このねじれを理論化しようとしています。

論文の意義

建築や都市論の文脈で見ると、この論文の意義は、都市を平面図や機能配置だけで説明せず、知覚、表象、メディア、消費を含む広い視点で捉えた点にあります。都市空間は設計された形だけで成り立つのではなく、そこに生きる人の見方やイメージの流通によっても成立します。池村は、近代都市の理念そのものがすでに揺らいでいることを示し、その先にある都市の経験的条件を、二つの概念で把握しようとしました。

また、論文は大都市を否定するのではなく、その複雑さを読み解くための語彙を与えています。都市の無秩序は単なる失敗ではなく、近代の理想が抱える矛盾の現れです。同時に、都市のイメージ化は単なる表面的現象ではなく、現代人の空間経験そのものを規定する力になっています。ここにこの論文の理論的な面白さがあります。